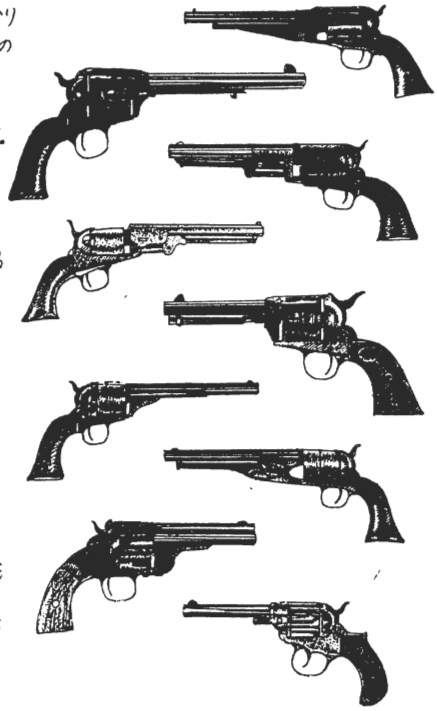
‘ὁ κόσμος, ἀλλοίωσις· ὁ βίος, ὑπόληψις.’

32号 1991.5.27
文・編集・発行
恋怪子

LIVE: THE WAIATS 1991.4.30 新宿アンティック

4月13日のライブが!!!で、このときのテープばかりきいていたから、4人がステージで演奏しているのを見ているだけでドキドキッ!
THE WAIATSって、なんか西部劇(ウエスタン)な感じがする。音楽がウエスタンっていうんじゃなくて。この日はとくにそれを強く感じた。
「SHOT GUN BOY」で「ひきがねは自分でひけよ」というところがあるんだけど、この銃って、私には西部劇でつかわれている銃に見える。



1991.5.4 新宿アンティック

私にとっていいライブって、音楽をきいていてどのくらい自分と向きあえるか、どのくらい自分が流れ出てくるか、で決まることがあるようだ。この日、THE WAIATSの演奏をきいていてそう思った。演奏に反逆心の量が足りないから、私からもそれに見合ったものしか出てこない。
「ひきがねは自分でひけよ」って歌われても誰に向ってひきがねをひけばいいかがわからない、自分に向ければいいのかもわからない。

1991.5.18 市川 CLUB GIO

かなり広いライブハウスのすみずみまで音はいきわたっているのに、それがステージからきいている方にむかってくる感じじゃない。なにかがステージのうしろに吸いこまれていく。ものすごくひきつけられているのに、そう感じられて仕方がない。4人はもちろんこっちを向いているんだけど、私にはうしろ向きで演奏しているみたいに感じられる。うしろ向きに時間が疾走していく。THE WAIATSって写真でいうと陰画(ネガ)かもしれない。歌の内容がネガティブというんじゃない、けっこう攻撃的なのに、あの4人がステージで演奏するとネガになる。
こういうふうに、うしろ向きの時間の疾走を感じさせるのはTHE WAIATSだけ。1年前のライブで「歌をとうして沈黙が伝わってくる」と感じたのも、4月13日のライブで「生きる悲みたいなものを感じない」と感じたのも同じものかもしれない。THE WAIATSのよかったライブってきっとネガなものなのだ。不思議な感動。
この日、ライブのあと市川から電車で帰るあいだウォークマンでテープをきいていようって気が全然おきなかった。目の奥に見えているステージを見ながら耳の奥にきこえている演奏をきいていたから。

THE WAIATS 次のライブ: 6/15 アンティック

LIVE: 毒入りマヨネーズ 1991.5.14 渋谷TAKE OFF 7

YOUをききにEIZIのライブにいったときEIZIのあとにやったのがこの毒入りマヨネーズ。1,2曲きいてつまらなかったら帰るつもりでいたのにとうとう終りまでしっかり聴いてしまった。ライブであんなに笑ったの、去年の4月10日エッグマンで、ザ・ぴくぴくずをきいて以来のことだ。
はじまってすぐに、ヴォーカルの人のおしゃべりをきいていて、えっ?これなんかザ・ぴくぴくずに似てる!って思ったら、キーボードの人がザ・ぴくぴくずのキーボードの人だっていうんだもの、えーっ?だって様子が全然ちがうんだもの。去年見たときはパジャマにスリッパ、髪の毛を女の子みたいにしばって赤いリボンつけてたんだもの。この日はジャケットをおしゃれに着こなしているんだもの。で、毒入りマヨネーズのヴォーカルの人、ノボルというそうだけど、ザ・ぴくぴくずの大坪サチオと話しぶりがそっくりで、大坪サチオの真似してんのかしらと思ったんだけど、キーボードの人とのかけ合い(演奏じゃなくておしゃべりのかけ合い)をきいていて、ノボルとかいっていたけど大坪サチオなんじゃないの?と思った。去年のザ・ぴくぴくずのときはギターをひきながらだったし、やっぱりずいぶん様子がちがっていたからすぐにはわからなかったけど、同一人物だと思うんだけど…?
ライブであんなに笑ったの、去年の4月10日エッグマンで、ザ・ぴくぴくずをきいて以来のことだ。そりゃあそうでしょう。毒入りマヨネーズの2分の1がザ・ぴくぴくずなんだから?

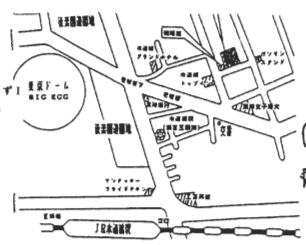
この2人が毒入りマヨネーズ(?)

竹内 悟(Dr)　ジェリー桑名(B)　大沢ヒロヒト(Key)　大坪サチオ(Vo. G)

毒入りマヨネーズのライブのことも書きはじめたのにザ・ぴくぴくずのことで書きおわるという…。文中の?は5/27のライブで判明予定

ザ・ぴくぴくず/ザ・ぴくぴくず! 東京ドーム BIG EGG
VMCH-1022 ¥2,800(税込定価)
発売:㈱ヴァーンメディア
販売:ポリドール㈱

ザ・ぴくぴくず
デビューLIVE決定!!



1991.6.9(SUN)
バリオホール
入場無料
OPEN 12:00 START 13:30
☆当日、会場にて、CD即売会を堂々開催!
(お買い上げの方にもれなくサイン色紙プレゼント)
☆強制はしませんが、当日出来るだけお友達を誘って多人数でお越し下さい。
お問い合わせ㊫イヴミュージック プランニング ☎03(3463)1729

ARTICLE: 佐藤良明(朝日新聞4/27夕刊「時評'91」)

「きれいな時代」もイメージ。「腰を振ってしゃがれた声で絶叫するロックンロールの野蛮さ」もイメージ。「何千何万の澄んだ瞳」もイメージ。「社会ぐるみの一大浄化キャンペーン」もイメージ。「うるわしの庶民性のシンボルになるほど浄化された銭湯」もイメージ。この人の書いていることは全部イメージ。
イメージがイメージを喰っているだけ。日糞が糞糞を喰っているより可笑しい。「笑ってくれ、俺はロックンローラーだ」といわんばかりに。これだぜ、と心の晴れる思いがした。この単純バカがロックンロールじゃなかったかだって。内田裕也をテレビの画面だけから見て「単純バカ」といい切ってしまうこのバカさ加減。内田裕也が「単純バカ」なら立候補なんかせずに、ロックンロールだけをやってるよ。この文の書き手は、ものごとをテレビとか映画とか映像(イメージ)として表現されたものを通して考えたり感じたりしているだけで、自分の肌身でジカにものごとにふれて考えたり感じたりしていない。そして、イメージの伝達回路が貧しくなっていると、他人を喰っている。映像(イメージ)として表現されている人間のありさまがきれいだから、生きている人間のありさまもきれいだといえてしまうのは、まさに「イメージ時代」の方寸手といえる。磯村候補が何かにまみれていないというのなら、この文の書き手もまみれていない、生きている人間の怠惰というものに。それは、生きていないということだ。テレビの前で死んでいるということだ。

(切り抜き提供:鈴木丈子)

きれいはきたない

佐藤 良明

きれいな時代である。セックスもきれいなら、不倫もきれい。ホラー映画でも、血みどろの肉塊が透きとおった青い光に包まれて、幻想的な美しさを放っている。先日アキ・カウリスマキ監督の『コントラクト・キラー』を観に行ったら、奥(にお)いのしみついたような安アパートの壁が、まるでファッション雑誌のグラビア・ページのようだった。
腰を振ってしゃがれた声で絶叫するロックンロールの野蛮さに、大人たちが眉(まゆ)をひそめた——なんて話は、それ自体が遠き日の甘い香りにつつまれる。いまやロックはイメージ時代の優等生。リード・ボーカルが「みんなぁ、盛りあがってるかぁー」とシャウトすれば、何千何万の澄んだ瞳(ひとみ)が「ウォー」とこたえる。どこかの学校が、その健康さを疑って、生徒にコンサート行きを禁止しでもすれば、社会はよってたかって意識の遅れを糾弾する。
どっかヘンだぞ、と思っていたら、都知事選の政見放送に内田裕也が登場し、「イェイ・ベイビー」のノリで、ブロークンな英語をさらしまくった。笑ってくれ、俺(おれ)はロックンローラーだ、といわんばかりに。これだぜ、と、心の晴れる思いがした。この「単純バカ」がロックンロールじゃなかったか。
社会ぐるみの一大浄化キャンペーンが進行している中で、たがいのバカを笑いあう、人情味豊かなコミュニケーションが危機にひんしている。「このバカヤロウ」「あんたこそナニヨ」——というテキストの会話が、実は長年つれそった夫婦の愛の(すくなくとも安堵〈あんど〉感の)表現になっていることを読み取れない学生が増えている。
イメージの時代に、イメージの伝達回路が貧しくなっているように思えるのは皮肉である。都知事選の磯村候補の銭湯めぐりも、実に窮屈な感じがした。うるわしの庶民性のシンボルになるほど浄化された銭湯に行って、一体何ときめれる」ことができるのか。インテリの嫌らしさをぬぐいさろうというのなら、逆に、おぞましいほどハードな議論をぶつけるべきではなかったか。

(米文学者)